

東海の古代

第272号 2023年4月

会長 : 畑田寿一
 編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
 HP : http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

築城から探る7世紀の九州の政治情勢

一宮市 畑田 寿一

663年、倭国は白村江の戦いに敗北した。倭国は唐軍の侵攻に備えて九州各地に砦をつくり、瀬戸内海沿岸には山城を構築したと書紀に記されている。しかし、構築された砦を眺めると、場所、構造、規模のいずれにおいても防御の目的で造られたとするには疑問点が多い。(書紀:『日本書紀』、以下同じ。)

掬智城(熊本)を例にとると、大宰府の南方の有明海からの侵攻に備えるべきであるが、「有明海が望めない」「有明海から大宰府に向かう進軍ルートに無い」「軍事施設が貧弱でせいぜい100名程度」など多くの疑問点が挙げられる。

書紀の記述の内、何を信じ、何を疑うべきであろうか、九州各地に造られた砦などを通じて検証してみたい。

1 怡土城との比較

怡土城は、8世紀中頃、唐が滅び朝鮮半島の緊張が高まる中、吉備真備により九州侵攻に備えるために糸島半島の高祖山山麓に構築された。戦争に使われることは無かったが白村江の戦いの百年後の出来事であり、8世紀においてもこの程度の防御施設が必須であったと考えられる。

怡土城が造られた理由は既存の防御施設では海からの侵攻に耐えられない為であろう。大野城や水城は陸上戦闘のための防御であった。

この事実は白村江の戦い以降の防御施設の役割について書紀の記述に疑問を投げ掛ける。本当に唐軍の侵攻に対するものであり、そんなに短期間に構築できたのであろうか。

城の面積	2.8 Km ²
築城期間	12年
防御施設	土塁 2 Km 望楼 7カ所

2 筑紫大宰府周辺の施設

(1) 筑紫大宰府の役割

一般には大宰府の前身是那珂遺跡群にあったと考えられている。宣化元年(536年)の書紀の記述に「**官家を那津のほとりに造れ。**」があり、この時ヤマトの外交窓口が造られたとされている。筑紫大宰府の名称は天智10年(671年)が初見であるが、付近の防衛施設である水城構築記事が天智3年(664年)に存在することから白村江の戦い後、防衛上行政機能をここに移したとしている。

しかし、遺跡からはもっと古い時代の出土品が発掘されており、周囲の山城を含めて短期間で造れるとは思えないので通説には疑問が残る。恐らく、白村江の戦い以前にいずれかの防御施設があり、白村江の戦い以降に機能が增強されたと思われる。書紀の記述の天

智6年(667年)筑紫都督府、天智10年(671年)筑紫大宰府は正しく、都督府は唐の羈縻^{きび}策の拠点を表し、唐軍の撤退後、ヤマト政権が九州政庁として使用したことを表していると思われる。

(2) 鞠智城の役割

一般には白村江の戦い以降の防御施設に武器や食料を備蓄するための施設とされている。有明海からの侵攻に対する防御の役割も持っていた。しかし、「大規模な倉庫が無い」「有明海が望めない」など通説では説明できない点が多い。唐軍の駐留を前提とすると海からの侵攻を考えなくても良くなり、話が合う。

駐留以前に何かがあり、駐留軍が整備拡大したと考えられる。

(3) 金田城、雷山城、水城、防人

書紀に拠れば、天智3年(664年)に唐軍の郭務悰が九州に訪れている最中、対馬、壱岐に烽火を造り、筑紫には水城を築いたとしている。勝戦国の軍師が訪問中に防衛施設の構築を行うことは考えられないし、水城は長さ1.2Km、高さ9m、幅80mもあり、1年程度で造れるものではない。見張り台と思われる金田城や雷城も侵攻軍が見える位置に無く、役に立つとは思えない。防人に至っては、記述はあるが存在を証明する遺跡が見つからない。何かがおかしい。

3 ヤマト政権の動き

年代	日本の出来事	朝鮮半島の出来事
大化元(645)	乙巳の変(大化の改新)	唐、高句麗に侵攻
斉明7(661)	齐明天皇を飛鳥河原に葬る	百濟王子豊璋が百濟へ(662)
天智2(663)	上毛野稚子ら新羅征討へ	百濟滅ぶ、 白村江の戦い
天智3(664)	九州の水城などを造る	唐軍郭務悰などが九州へ(665)
天智5(666)	守大石を唐に派遣(665)	唐の太宗、泰山で封禪を行う
天智6(667)	近江に遷都	唐、朝鮮各地に都督府を置く
天武元(672)	唐軍撤退 、壬申の乱	唐と新羅・高句麗との戦闘激化

(1) 朝倉宮への遷幸

書紀に拠れば、斉明7年(661年)、天皇は従来の全方位外交から百濟支援に外交方針を転換して、九州の朝倉橘広庭宮に遷幸した。しかし、高齢のため遷幸後2か月で崩御した。中大兄皇子は亡骸を飛鳥まで移送してその年の暮れに埋葬している。翌年には百濟王の遺子の豊璋に兵を付けて百濟に送り返し、翌々年(663年)3月には新羅征討のために上毛野稚子ら2.7万の軍を朝鮮半島東部に送り込んだ。しかし、8月には朝鮮半島西部で白村江の戦いで大敗したとしている。

天武天皇の子の大津皇子は663年に九州で誕生したとされているが、661年には天智天皇一行はヤマトに戻っており、広庭宮には遺跡らしいものは出土していない。齐明天皇は本当に九州まで出かけたのであろうか。更に、663年の新羅征討も百濟支援ならば行くべき箇所が違う。この辺りの中大兄皇子の行動やヤマト政権の動きには疑問点が多い。全てがヤマト主導の出来事であったのであろうか。

(2) 那津官家の役割

この時代の那津官家は一貫してヤマト政権の九州での官衙として扱われている。この認識は正しいと思われるが、朝鮮半島の外交を一手に引き受けていたかについては疑問が多い。それが事実とすれば筑紫大宰府は何のためにあるのか、なぜ白村江の戦い以後この地

点を防御しないのか、疑問点が山積している。

4 まとめ

以上、書紀の記述を現実にあててみると、書紀の記述は矛盾に満ちていることが分かる。書紀はヤマト政権の歴史書であり、書紀に書かれていない事柄はヤマト政権以外で起きたことか、書きたくないことと考えるべきであろう。

全体を俯瞰してみると、「**敗戦の翌年に郭務儂が唐軍の軍使として事前交渉に訪れ、翌々年（665年）から唐軍が駐留し傀儡政権が樹立された。この状況は天智天皇が没した翌年（672年）まで続いた。**」と考えざるを得ない。傀儡政権の当事者としては筑紫君薩野馬や韓島勝娑婆、布師頸磐などが挙げられる。唐軍は筑紫大宰府に452名が駐留し、それを守るために2千名の百濟軍が動員されて周辺の軍事施設を補強し、大野城、基肆城、鞠智城に駐留軍が配備された。

上記に対してヤマト政権は那津官家に大臣級の全権大使を置き、交渉に当たらせた。天智天皇が九州に滞在して陣頭指揮をしたとする説が根強いが、当時の最高実力者の藤原鎌足がヤマトに居続けているので、この説は成立しない。

白村江の戦いの当事者は一般にはヤマトとされているが、唐軍の駐留箇所からみて九州勢力であった可能性が高い。ヤマト側はこれ以上の侵攻を防ぐために戦後交渉に積極的に関与した。唐軍の駐留が解除されたのは新羅の善戦と則天武後の台頭による唐軍の弱体化によるもので幸運であった。

九州勢力は白村江の戦いで降滅した。ヤマトの政治体制が組み込まれ、那津官家にあった連絡事務所が筑紫大宰府に移され国府が設けられた。しかし、地方自治は筑紫大宰府を中心に行われ、木簡による物の動きをみると、租税などの徴収結果がヤマトに送られるようになるのは7世紀末になってからである。7世紀後半の木簡から物の動きを推測すると、中国、四国はヤマトの領域で九州北中部のみが大宰府の領域になっている。これが九州王朝の実態を表していると考えて良いのではないか。

息長氏について

東海市 大島 秀雄

1. まえがき

記紀における有名氏族の息長氏についてはさまざまな先行研究がなされていますが、その中から『学習院史学26号』（1988年）に所収の「継体王系と息長氏の伝承について」（篠原幸久著）と『日本古代国家成立期の政権構造』（倉本一宏著、吉川弘文館、1997年）などを参考にして思うところを述べてみたい。

2. 継体天皇は息長氏の出身か

継体＝息長氏論の前提となる古事記の継体天皇の近江出身説については、書紀にみえる父の彦主人王の近江国高嶋郡三尾の「別業」、つまり継体の出生地（その語義からいえば継体系の本貫を離れた一つの経営拠点であること以上の意味をもたない）と結び付けられ、書紀が後に継体が母方の越前で成長し、そこから大王に擁立されたと説くが、古事記は簡略に「**自近淡海国、令上坐而**」とその出身＝出生地を述べただけであり、継体の本貫は近江や越前ではなく、よって継体の出身氏族が息長氏ではないとの説は有力ではないかと思われま

す。また、継体天皇に関連する事項としては、仿製鏡である隅田八幡宮人物画像鏡の銘に「**癸未年・・・孚弟王在意柴沙加宮時・・・**」という文字が見られることは広く知られるところ

であり、癸未年については、西暦503年説が有力です。

そうであるならば、継体の父親が『上宮記』では汗斯（ウシ）王であり、書紀では彦主人（ウシ）王、継体が書紀では彦太（フト）尊とも呼ばれていることから、人物画像鏡銘の孚弟王はフト王と呼ばれていたのではないかと思われ、つまり即位前の継体天皇は意柴沙加（忍坂）宮にいたことになるのでしょうか。

この意柴沙加宮とは忍坂大中姫の後宮の跡で、この宮は一族に伝領され、6世紀初頭には即位前の継体の宮殿になっていたのであろうと想定されています。

従って、書紀に記されているように継体が河内の葛葉宮で即位し、山城の綴喜・乙訓を経て20年目に大和の磐余の玉穂に都を移したというのは史実ではなさそうです。

おそらく継体は継体陵と推定される今城塚古墳のある三島野古墳群とかかわる摂津在地勢力の首長であり、淀川水系を媒介として山背南部、近江、さらに越前、尾張といった地域の政治勢力と結びつき、河内南部や和泉北部勢力を抑えて大王位についたとする説には説得力があります。

3. 記紀の息長氏関連記事の信ぴょう性

息長氏関連の内容について、敏達天皇までは古事記の、舒明天皇から天武天皇までは書紀の記事を整理すると表のようになります。

要約すれば、

(1) 息長氏は記紀の王統譜に「王」名の王族として位置付けられる一方、そこに反覆的な伝承を定着させている。

(2) 「河内王朝」の神話的始祖である神功皇后にオキナガタラシヒメの名を与え、舒明天皇の諡号にもオキナガタラシヒヒロヌカとそのウヂ名がみえる。

(3) 古事記では継体の曾祖父意富富杼王に息長氏の出目が置かれ、その父若沼（野）毛二俣王が息長氏の血を引く。

といったところです。

ここで、この記事をどのように評価するのかですが、大方の意見としては、近江国坂田郡の二大首長墓群（姉川流域・長浜垣籠古墳群一坂田酒人氏、天野川流域・息長古墳群一息長氏）の造墓状況は、五世紀以前における坂田郡内の有力首長は坂田酒人氏こそ想定されるべきであり、元来坂田酒人氏との従属関係にあった息長氏が、坂田郡域で自立化し畿内勢力との直接の政治的関係に入ったのは六世紀以降であるとされており、息長氏が歴史的事実として王権と接触するに至ったのは敏達天皇と息長真手（王）の女広姫との婚姻時点であり、敏達と大后広姫の間に出生した押坂彦人大兄皇子が、その子田村皇子（舒明天皇）の即位により新王統の始祖とされたことが息長氏伝承の敏達前代の王権史への加筆のきっかけだったとする説が有力です。

また、敏達王系と密着した疑似皇親氏族息長氏の伝承は既成の王権史の構成論理に沿う形で、継体系譜を遡及していくことを許されたのであり、逆に五世紀の二つの大王系譜を史実の核にもつ仁徳系の二王統（履中系・允恭系）に息長氏伝承がみえない理由もここに求められるであろうとする説は妥当な意見のように思えます。

尾張氏の場合も、書紀の孝昭天皇の皇后・世襲足媛、日本武尊の妻・宮簀媛、崇神天皇の妃・大海媛の記述は事実ではなく、これは尾張氏が壬申の乱の功臣であったので加筆が許されたのであろうとみられ、息長氏と同様な書紀の加筆の例です。

4. 息長氏の真人姓賜姓について

天武紀13年10月条では「八色の姓」が制定され、その筆頭の真人に息長公ら13氏が賜姓されています。その理由について倉本一宏氏は概略を次のように述べられており、妥当ではないでしょうか。

- (1) 越前や息長氏ら北近江の豪族は継体の擁立、後背勢力として大きな功績を残した。
- (2) 書紀に息長真手王の女とされる広姫が敏達皇后となり、その所生の押坂彦人大兄王子が父方からも母方からも純皇室系の始祖となり舒明以後の大王位を独占し天武に至ったが、息長氏は皇祖大兄御名入部（忍坂部や丸子部といった押坂彦人大兄皇子伝来の私領）の湯人として純皇室系の王子女を養育し、その形成、維持に大きく寄与した。
- (3) 壬申の乱において、その帰趨を決するほどの戦功があった。

書紀に直接的な言及は無いが、近江軍が息長氏の本拠地を通過して7月2日には玉倉部邑で撃退され、7月7日の息長横河でも近江軍は破れた経緯からして、乱の動向を静観していた息長氏ら北近江豪族が7月7日の戦には大海人軍に加担し、一気に近江軍が滅亡へと向かったことは、北近江豪族の活躍のたまものであり、乱後の天武朝における彼らの処遇を決定的なものにした。

5. おわりに

記紀には息長氏で王を名乗っている人物が散見されますが、息長氏自身が王族でないのは明らかであり、北近江の豪族出身氏族であったことは確かなようです。

敏達前代の息長氏伝承が虚構であるならば、書紀の気長足姫尊（古事記では息長帯比売命）を称する神功皇后の存在もあやしく、神功皇后関連の記事は虚実を織り交ぜた物語なのでしょう。

内 容	出 典
近淡海の御上の祝が仕え祭る天之御影神の娘、 息長水依比売	開化記
息長宿禰王 が葛城の高額比売を妻として生ませた子は、 息長帯比売命 、 息長日子王	開化記
倭建命の一人の妻の生んだ子は 息長田別王	景行記
息長田別王 の子は杵俣長日子王。この王の子は 息長真若中比売	景行記
息長帯比売命 と結婚してお生まれになった御子は、・大鞆和気命、別名は品陀和気命（応神天皇）	仲哀記
昨俣長日子王の娘、 息長真若中比売 を妻として生ませた御子は若沼毛二俣王	応神記
応神天皇の御子、若沼毛二俣王がその母の妹、百師木伊呂弁、別名は弟日売真若比売命を妻として生ませた子は大郎子、別名は意富富杼王。 この意富富杼王は 息長君 などの祖先である。	応神記
この天皇が意富本杼王の妹、忍坂之大中津比売命を妻として	允恭記
息長真手王 の娘、麻組郎女を妻として	継体記
息長真手王 の娘、比呂比売命を妻として生ませた御子は忍坂日子人太子命、別名は麻呂古王	敏達記
息長足日広額天皇 は敏達天皇の孫で、彦人大兄皇子の子である。	舒明即位前紀
息長山田君 が歴代の日嗣の次第を誅によんだ。	皇極紀元年 12 月条
息長君 ら 13 氏に姓を賜わって真人といった。	天武紀 13 年 10 月条

日本語も朝鮮語も上書きされた

刈谷市 酒井 誠

1 序論・概論

朝鮮半島でも日本列島（以下、半島、列島と表記）でも、それぞれの民族が文字を持たなかったために、漢字を自らの言葉に利用してきたと思われる。

福岡県の志賀島で見つかった「漢委奴国王」の金印は、発見の経緯や出土場所の状況を考えると、漢から授与されたものであると私には考えられない。また、半島には、紀元前

12世紀から紀元前194年まで箕子朝鮮が存在したことになっているが、これも信憑性は極めて低く、紀元前108年から4世紀までの原三国時代やその後の三国時代も、百済や新羅など国家として統一されていたかどうかは、極めて疑わしいと思っている。

しかし、半島側も列島側も統一国家ができていない時代であっても、多くの交流がなされていたことは両者から出土する遺物の研究から明らかにされている。たとえば、養蚕は、縄文時代の織物が北九州から出土しており、半島側と異なる繭から作られたものであることが証明されている。さらに、6,000年以上前の女性の人骨と翡翠製の玉珠が、朝鮮半島の南に浮かぶ欲知島の貝塚遺跡（慶尚南道統営市）より見つかり、その人骨のmtDNAは、日本人の持つ縄文遺伝子と95%までが一致している。

一方、長崎県佐世保市にある福井洞窟は、35,000年前から縄文時代早期まで続いたとされ、同じく佐世保市の泉福寺洞窟からは、豆粒文土器が見つかり、16,000年前から続く遺跡として注目される。

古代より半島側と列島側の交流が見られ、半島南端の靉島遺跡からは、倭系土器の須玖Ⅰ式Ⅱ式土器が見つかり、金海市の4～5世紀の遺跡の礼安里遺跡の人骨は、鳥取県の青谷上寺地遺跡から出土した人骨と形状がよく似ているとされる。（オーストリア・ウィーン大学研究チーム）

古代の貴重な石器類では、列島には硬玉翡翠（糸魚川産）・黒曜石（佐賀県、長崎県の県境にある腰岳産）が、半島にはアマゾナイト（韓半島産）があり、交易に使用された。弥生時代に入り列島では翡翠文化は途絶えたが、半島では、縄文時代に輸入された翡翠が新羅の王冠などにちりばめられている。

韓国考古学会では、12,000年前～7,000年前の期間について無人時代として人類の痕跡が認められないとされるが、2,000年以上前の人骨は見つかりにくいのでそうは思わない。現段階としては、人骨の出土は韓半島の南部の海に面した地域にしか見つからないため、今後、半島内部や高緯度地方より人骨の発見が待たれる。

また、古代の九州では火山活動が活発で、始良カルデラの爆発（3万年前）、鬼界カルデラの爆発（7,500年前）が目につく。特に鬼界カルデラの爆発では、九州の縄文人が半島をはじめ世界各地に漂流した可能性を唱える学者も多い。

半島にも列島にもよく似た言語はあったが、表記するための文字を持たずに漢字を利用してそれぞれが独自の方法で言語表記を工夫してきた。韓国では、漢字文化は朝鮮半島内で育ち半島を経由して列島に入ってきたと主張されており、韓国での言葉のなごりの一部が、書紀、古事記、万葉集などに利用されているとして、それを吏読と呼んでいる。そうした言葉の輸出は、半島から列島のみならず、逆に列島から半島に輸出された言語も存在すると思う。東シナ海を媒介として周りの国々は、語彙を共有してきた。しかし、半島では、多くの戦乱が続いて、漢字文化の芽を育てることができないまま途中で断念せざるを得ない状況に陥ってしまったと思われる。そのため当時の痕跡は、郷歌（ヒャンガ：郷札ともいう漢字の扱い方法）くらいにしか残っていない。郷歌の響きは、京都市の涌泉寺で行われる五山の送り火の「題目踊り」に似ている。列島では、漢字文化が書紀、古事記、万葉集、推古朝遺文（各種の石碑、仏像光背、江田船山鉄刀、稲荷山鉄剣）などに見ることができる。

7世紀の初めに、遣隋使が直接隋に行き学び取ってきたと思われる言語が、呉音と呼ばれるものである。決して呉の国で話されていた言葉というわけではない。天武天皇の時代になると、遣唐使の派遣の数も増えて、唐の都の長安で話されていた漢音を利用するようになる。特に、798年には、太政官符として「漢籍の音読は漢音を用いて、呉音は用いてはならない。」と定められ、それ以来、原則として漢音が使われるようになった。しかし、仏典関係は呉音で発声されているものが多く、簡単にはすべてを漢音にはできなかった。

古代に漢字を使って朝鮮の母国語を表記する言語発音体系を「古韓音」と呼んでいる。

まず、最初に日本に入ってきたと思われるその「古韓音」について、そもそも古代の新羅や百済でどのような言葉が使われていたのかわかっていない。百済という国家も政治の仕組みなどがはっきりとわからず、この時代に北部の高句麗が圧力を強めてきたために、百済の王様や中央官僚は、高句麗系・中国系の漢字文化を持ち、庶民は百済人で倭人に近い言語であって、それぞれ使用していた言語も違っていただようである。古代の文献の調査から、百済語は、「開音節（母音で終わる）」で和語に近かったようである。一方の新羅では、漢音に近く「閉音節（子音で終わる）」（閉音節の例：欲知島＝ヨクジド YokJido 욱지도）で語尾に子音が来る発音体系であったようで、現在の日本人が発音するのは極めて難しいと思う。

4世紀以前の半島で使われていた漢字を用いた発音体系が書紀や古事記、万葉集に残っていると思う。古韓音が列島に入ってきたことばかりを述べる学者がいるが、逆に列島で作られた発音体系や語彙が半島に取り入れられたことも考えられる。ただ、そのような研究はまだなく、また、古韓音を使った言語体系の吏読（北朝鮮では、リド 리두、韓国ではイド 이두）については、資料が少なく研究が進んでいない。アイヌ語には、閉音節の語彙が存在し、吏読の中にも閉音節があることから、縄文時代以前は列島内でも閉音節で話していた可能性がある。1443年にハングルが発明されてから古韓音はほとんど失われ日本に現存する書物から推定するのみで郷歌自体が解読できないような状態になっている。

日本に入ってきた漢字の文化は、次のように時代を追って上書きされてきたと思う。

D・E祖語（アフリカ）8万年～10万年前：タンゴブ、クニ、アケボノ等を使っていた。
→ D2東シナ海祖語 3～4万年以上前：ウルシ、熊などの語彙の獲得。
→ 吏読：1800年くらい前？ ⇔（呉音→漢音）
→ AD300年以降 アシュラ：上代特殊仮名遣い（日本列島内）
→ 1800年前？ →各種仮名の発明 →日本語の完成10世紀以降

書紀には、上記の発音がすべて残っている。書紀もそうした表記の研究を学ばないと理解できないところが多い。万葉集も古事記も吏読の知識がないと意味内容の理解や短歌の解読ができない部分もある。まだ、半島の三国時代、国も完成していない時代の、いわゆる地方の方言のような言語体系を、列島に取り入れた名残が万葉集や古事記、書紀などに残っているのではないかとと思われる。

吏読の技術が日本語の助詞、接続詞、副詞の作り方に入っている部分があると言われていいる。漢字が日本に入ってきた時に、日本語の文章を漢字で表すことは、漢語と違った語順、四声、助詞、活用などの多くの問題があった。特に、助詞は苦労したことであろう。

その助詞は、列島では、本文よりも小さな漢字や片仮名を用いて加えられたようである。膠着語である日本語は、自分たちの語彙体系に役に立つものはどんどん進んで取り入れた。一方、半島では、助詞を表すのに小さな漢字で表記で表したと思うが、途中で漢字の利用を断念したため、その表記についてはハングルの作成まで待たなくてはならなかった。半島にも日本語と同様の訓読みが存在していたが、ほとんど消滅してしまったと思っている。

日本では、神を「かみ」と訓読みで呼ぶが、韓国は「しん」でありこれは明らかに漢音の影響であり、韓人の使っていた訓読みはどこかに行ってしまった。半島側で使っていたと思われる訓読みが消滅したことは素晴らしい財産を失ったことになる。

ハングルは、当初は女性だけの利用で男子はすべて漢字や漢字とハングル交じりの使用であったが、20世紀末には、男女ともハングルだけで表記するようになった。ハングルの中にも吏読の仕組みは組み込まれていると思う。

2 日本と韓国は3万年前には共通の祖語

現代の韓国や日本列島、琉球、アイヌ語で話されている語彙を調べると、先に述べたよ

うに、同じ意味を表し、よく似た発音で表記する語彙がいくつか見つかる。そうした語彙については、ここで示した古韓音以前の数万年前に韓人や倭人などが獲得した語彙と思われる。そのはるか以前に持っていた言語の上に、古韓音、呉音、漢音で語彙が上書きされて、現在の日本や韓国の言葉に変化してきたと考える。

今から1600年前の4世紀ごろまでは、列島と半島にいた民族が似通った言語体系を持ち、共通の語彙を持っていた可能性がある。

3 発酵食品とD遺伝子の移動ルート

アフリカ単一起源説は、地球上のヒトの祖先はアフリカで誕生し、その後世界中に伝播していったとする仮説である。これに基づく列島へのY染色体ハプロタイプD遺伝子の移動ルートには、いくつかの説がある。大野晋の日本語タミル語同系説のインドのタミルは、このD遺伝子の移動ルートの1つに入っている。

このインドにもミャンマーにも発酵食品の納豆があり、沖縄の「豆腐よう」も発酵食品である。熊本県五木町には豆腐の味噌漬の「山ウニ豆腐」なるものがあり、半島にも納豆がある。これらの発酵食品はD遺伝子の移動ルートとの関連性があると考えられる。

遺伝子研究と合わせて、こうした発酵食品を始めとする食生活や習俗など共通の文化の比較によって、さらにD遺伝子のルートが解明されると考える。

4 まとめ

当会報誌の269号から本号まで、^{だつかつかんしつぞう}脱活乾漆像の研究から漆の分布、漆の語彙の使用状況、D遺伝子を持った人類の移動ルートや、その移動ルートに残る文化について述べてきた。

私は、韓国語と日本語には、共通点がみられることから、D遺伝子のルートなどから紀元前3万年から紀元前2万年には元祖の言語は同一ではなかったかと推測している。

もともとは、同じ言葉遣いであったものが、列島と半島ではそれぞれ独自の文化が発展し、その後に移入した漢字の利用により文字として表現され、その中に共通の要素を見いだせるのではないかと思う。

5 これからの課題

私は、長い間「日本人のルーツ」や「渡来人のルーツ」を探ってきたが、文献史学だけでは不可能であるので遺伝子工学や言語学の力を借りて研究を進めてきた。

日本語と韓国語が同じ祖先を持った人々から作られた言語であるとの仮説にたって、互いの言語を理解するためハングルを学びながら、今後は名詞のみならず動詞、形容詞、副詞などに対象を広げて比較言語学に取り組み、両言語の共通性を探っていこうと考えている。

前回の例会の話題

- ・木簡から見た九州王朝の存在
一宮市 畑田寿一
- ・脱活乾漆像と塑像の考察から見た東アジアⅢ
刈谷市 酒井 誠
- ・太上天皇大行天皇について
名古屋市 石田泉城

例会の予定

- 1 日時 4月15日(土) 13時半～
 - 2 場所 名古屋市市政資料館
- 来月以降の例会
全て土曜日 5/20、6/17、7/15

会員の投稿について

- 会報誌への投稿 (編集担当: 石田)
toukaikodai@yahoo.co.jp
- 投稿締切り日 4月30日(日)

年会費の納入のお願い

- 1 年会費 5,000円(会報誌等送料込み)
 - 2 納入期限 2023年5月20日(例会予定日)
 - 3 振込先
- ・金融機関: ゆうちょ銀行
トウカイヨクダイケンキョウカイ
・名称: 東海古代研究会
・店名: 二一八 店番: 218
・口座: 普通 1299395

募集中!